

国際協力特別賞

バングラデシュの少女に向けて

福岡県立修猷館高等学校 2年

ラワンチャイクン 茉莉

Who made my clothes? 「私の服は誰が作ったの?」。ブランドの話ではない。今あなたが着ているその制服は、スーツは、T シャツは一体“誰が”作ったのか。日本のほとんどの高校生は、自分たちの衣服の出所に興味を示さない。それがいかに好みか安いかだけを見て、それが作られている国や作る人々にまで想いをはせることはないのである。

たとえば服のタグを見てみると、中国やインド、ベトナムなど、そのほとんどがアジアの発展途上国で生産されているのが分かる。世界中のブランドが、その人件費の安さと豊富な労働力に依存しているのだ。中でもアジアで最も縫製工場が集中している国は、バングラデシュだ。アジアの最貧国の一つであり、「世界の縫製工場」とも呼ばれる。

そのバングラデシュの首都ダッカ近郊のシャバールで、2013年4月24日、死者1,127人、負傷者2,500人以上を出した「ダッカ近郊ビル崩落事故」が起こった。オーナーによる違法建築と、工場の大型発電機と数千台のミシンによる振動が縫製工場の崩壊を誘発したのだ。しかし明らかになった問題は、これだけではなかった。当時の従業員の賃金は、バングラデシュの標準生活費の4分の1にも満たなかったことや、その多くが女性であるのに、産休が認められず、仕事中はトイレにも行けないような、劣悪な環境で働いていたことも明らかになったのだ。

なぜそうも過酷な条件下で、彼女たちは働かなければならないのか。それは、貧困だからだけでなく、他ならぬ日本や欧米の低価格でグローバル展開するブランドが、バングラデシュの劣悪な労働環境や安価な労働力に依存して、利益を追求しているからでもある。

バングラデシュの女性労働者は3,000万人。全労働人口の約40%を占める。そして5歳から17歳までの児童労働者は、インドに次ぐ500万人である。しかし最近では低年齢化が進み、国際労働機関もその数を把握しきれていないのが現状だ。私は愕然とした。「ダッカ近郊ビル崩落事故」では、一体何人の少女が犠牲になったのだろうか。事故で母親を亡くし、自身も重い傷を一生負うことになった写真の幼い少女の姿が忘れられない。さらに、バングラデシュでは児童労働者の5人に1人が10歳以下だという。10歳といえば、私は小学4年生で、明日の生活の心配もせずに生きていた。一方、本来学校にいるべき彼らは、朝から晩まで工場や道端で身を粉にして働いている。経済発展を遂げる日本の私たちの生活が、決して当たり前ではない過酷な日常が、バングラデシュにはあるのだ。

では、劣悪な条件下で働く女性や児童をめぐる問題は、寄付などの金銭的な支援で解決するのか。いや、それでは解決しない。富裕層と貧困層との間の激しい格差をなくすことが、本当に目指す

目的地ではないだろうか。

事故から4ヶ月、日本のブランドの1つ、ユニクロは「バングラデシュにおける火災予防および建設物の安全に関わる協定」に署名した。国際的な水準には程遠いが、今回の事故を受けて、日本のブランドも少しずつ取り組みを始めている。では、高校生の私たちには何が出来るだろうか。

Who made my clothes? とは、今回の事故をきっかけに誕生した団体、ファッション・レボリューションの言葉である。ほとんどの高校生は普通、自分たちに直接関係のない発展途上国の出来事に関心が薄い。しかし、「私たちの着ている服は、どこで、誰が作ったのだろうか？子どもが苦しんだり、環境を汚染したりしていないだろうか？」と考えてみると、その国との繋がりが見えてくる。

私たちに出来ることは、ファッション産業のゆがんだ構造を想像して見ること、その問題に関心を持つこと。そのことをやめてはいけない。「I made your clothes.」と笑顔で返ってくるまで。